

特別寄稿



大東文化大学環境創造学部

教授 山本孝則

以来3年半、数名の教員と地元市民が細々と始めたこの小さなプロジェクトが、いまでは各方面から大きな関心と好感を寄せられるまでに成長してきた。地域通貨サンク、多世代共住・多文化共生を核とする、「再生プロジェクト」の内容それ自体はすでに本紙のほか、全国紙などでも紹介されている。

ここでは、高島平再生プロジェクト委員会(環境創造学部環境創造フォーラム運営委員会の一機関)の座

幸い、「再生プロジェクト」に基づく環境創造学部の教育改革努力は、文科省の2007年度「現代的教

域を「持続可能な都市」と

と地元市民が細々と始めたこの小さなプロジェクトが、いまでは各方面から大きな関心と好感を寄せられるまでに成長してきた。地域通貨サンク、多世代共住・多文化共生を核とする、「再生プロジェクト」の内容それ自体はすでに本紙のほか、全国紙などでも紹介されている。

ここでは、高島平再生プロジェクト委員会(環境創造学部環境創造フォーラム運営委員会の一機関)の座

と地元市民が細々と始めたこの小さなプロジェクトが、いまでは各方面から大きな関心と好感を寄せられるまでに成長してきた。地域通貨サンク、多世代共住・多文化共生を核とする、「再生プロジェクト」の内容それ自体はすでに本紙のほか、全国紙などでも紹介されている。

ここでは、「再生プロジェクト」と名付けられたユニークな地域再生運動が始まった。

ところから、2004年9月、高島平再生プロジェクト(以下「再生プロジェクト」と略記する)と名付けられたユニークな地域再生運動が始まった。

い。

かじめお断りしておきた

ての私見であることをあら

い。

整理しておこうとする。

ちなみに、小稿は座長として

さる将来都市像に絞って

い。

希望の持続可能な都市を求めて

すべての物事を活かす「リンクの思想」



文化発信力のある健康教育都市

妻芽、ホップ、水の相乗作用でビールが出来るにし

ても、美味しい健康新たに

いビールを持続的に提供す

るという確固たる目標がな

育二一ノ取組支援プロジェクト」(現代GP)の「地域活性化への貢献」部門で採択された。「持続可能な都市再生」の担い手を求めて

トによる「環境創造型人材」の育成」、略して高島平GPである。

高島平の将来像を打ち出す上で画期となつたのが、GP活動の一環として開催された「高島平ルネッサンス」シンポジウム2007(07年10月20日、大東大板橋校舎多目的ホール)であつた。

今日、底の見えない不信感、不安感が経済・政治・行政・市民生活・自然環境など随所で頭をもたげている。そうした底なしの不安感が頭をもたげている時代だからこそ、わが高島平の将来構想には、世界に通用する「地域再生研究セ

ンター」の創設に一役買つた「再生プロジェクト」の必然的な帰結と言つていいだろう。

教育とは何よりも、心身ともに健な個人が文化発信力を培いつつ、自ら社会的人格へと陶冶していく

超少子高齢化社会で何よりも重要なことは、老人達が社会の主体として活躍できるように、若者・子供達と「教え学び励まし合える

空間」をソフ

ト」は、こうした「空間のリンク」にまで視野を拡げたときに、真に「持続可能な都市再生」を語りうる地

域で、人材育成という基盤を備えることによって、都市再生の普遍的モデルケ

ースになりつつ、希有な土地柄である。他に例のないこの街の挑戦は、今後、国内のみならず広く世界から注目されるに違いない。

それは、活きた「文化発信」が現実である。

超少子高齢化社会で何よりも重要なことは、老人達が社会の主体として活躍できるように、若者・子供達と「教え学び励まし合える

空間」をソフ

ト」をソフ面のみならずハード面で創り出してい

くことである。前述の教育の本旨に照らせば、それは單なる箱物を越えた、緑・

赤・水が「有機的に結び

つけ、関連づけていくリンク

は、この街で育ち学んだ青

年達が帰ってくるだろう。

年達が帰ってくるだろう。高島平を愛する人々が新装

なった広場に集い、帰ってきた子ども達と一緒に地元産「高島ビール」で乾杯する。そんな日を夢見ているのは筆者一人だらうか。

もかく、妻芽もホップもそれを決して美味しいものではない。だが、これら四

つの要因を丁寧にリンクしえ方及び、そこから引き出される将来都市像に絞つて

い。その私見であることをあらかじめお断りしておきた

い。なぜなら、留学生、日本学生の区別なく大東生が団地に入居することで、団地と大学は「多世代共住・多文化共生」という少子高齢化・グローバル化時代を乗り越える確かな拠点にならうから。大東大がURから一括借り上げた団地住戸への15名の学生がこの2~4月に入居すること

で、拠点づくりはようやく成功する。高島平の街を元気にする「人間関係の輪」が広がっていく。団地と大学とを

戦略的なリンクを媒介するサンク(高島平地域で使えるポイント)によりリンクされ、高島平の街を元気にする「再生プロジェクト」を貫いていく。「再生

大東生の組織的な入居者が新たな社会関係を生み出す媒介項である。いろいろの市場経済」と「善意に支えられたいた地域ボランティア活動」とが地域通貨サンク(高島平地域で使える

原料は、妻芽、ホップ、水の3つにすぎない。水はど

ういふて、ビールの「アルコール飲料に変わっていく。「再生

た、先進的で活き活きとした高島平像が見えてくる。

なぜなら、留学生、日本学生の区別なく大東生が団地に入居することで、団

地と大学は「多世代共住・多文化共生」という少子高齢化・グローバル化時代を乗り越える確かな拠点にならうから。大東大がURから一括借り上げた団地住戸への15名の学生がこの2~4月に入居すること

で、拠点づくりはようやく成功する。高島平の街を元気にする「人間関係の輪」が広がっていく。団地と大学とを